



仇泚續七部集
万

^ 5
2168
2



利5
2/168
24



有海序

これの古漢に... 瀨橋の... 市座と離... 芭蕉... 其は... 年... 福...



表の字を費してまことなる後次めあり
しむ一年越れ西遊の杖を引いて膝を山後のまこと
あまたなり海岸流流の風水をも照らぬ一かかは入
るまの年持もあまたなり辰己ありれ掉家の夢を
ぢれむねしく早稲の香れ一白とあましくなれ結一と
年を終る浪化風人の白鬚と世をなげくまことより
あつれ浦山をりけあましくなれまことより
けるの風も移る浪もあつてえもしくぬぬ流のほまふ
あつれまことよりまことのまことよりまことより
感せしむるにまことに袖を捨ひまことをあつて終り
け集り根きまことよりぬまの流流のまままことより

ア
一

まことと記せんまことなる後次めあり
あつれまことよりまことよりまことより
けりまことよりまことよりまことより
章のまことよりまことよりまことより
ありまことよりまことよりまことより
またまことよりまことよりまことより

瀬高楚納文艸謄書



有取海

あまのまに

早稲の香や分入にまは有と海 芭蕉

けり早稲に縁二は奥のしゆは
まをを送りしゆはしゆは
らよのしゆはしゆはしゆは

芭蕉の海取のしゆは
松と送るしゆはしゆは

ア二

早稲の香や有とめりしゆはしゆは
又稲の香や有との浪化
しゆはしゆはしゆはしゆは
わのしゆはしゆはしゆはしゆは
しゆはしゆはしゆはしゆは

芭蕉の海取のしゆは

先入や山家の秋をりしゆは
り人や山田のしゆはしゆは
田藤へ早稲のしゆはしゆは
又稲をりしゆはしゆはしゆは

惟然
之道
正秀
去来

花のうらやま輪つゝこゝろ毎の垢
刈入てうらやまぬれりりりりりり
まふなりま輪の径や秋落入
又輪の田う刈とくうううう小村外
山おやまて紗秋の香薫散
三
中
呂
風
日
嵐
音
日
其
繼
日
林
紅
句
空

病中

秋の蠅うらやまゆしとせやうら
すうくし西瓜切く種のおお
七のや妹とこゝろこゝろめめ
ゆきうとねとこゝろのむけしじ
取らぬもかこゝろのうらぬの暗森うら
カ
秋
之
坊
イ
カ
陽
和
芭
蕉
去
来
丈
草

ア
三

花のうらやま輪つゝこゝろ毎の垢
刈入てうらやまぬれりりりりりり
まふなりま輪の径や秋落入
又輪の田う刈とくうううう小村外
山おやまて紗秋の香薫散
サ
カ
荒
蕉
小
倉
備
閑
夕
京
風
田

花のうらやま輪つゝこゝろ毎の垢
刈入てうらやまぬれりりりりりり
まふなりま輪の径や秋落入
又輪の田う刈とくうううう小村外
山おやまて紗秋の香薫散
イ
カ
卓
袋
乙
茄
セ
蟬
胤
ミ
刈
良
サ
カ
野
明

おしの西あふにさうお 操取
 錦水 錦水
 電のふとさ出るぬる 夜あけけ
 大坂 加香
 電や門のりるあふらう おうさ
 加香 加香
 あさうけややせぬるやうの 焼はらり
 昌房 昌房
 葦や梢よ坂の 遠あまより
 秋風 秋風
 あさう白や水の 引る海のとら
 平交 平交
 女あゆむるのさうら まにあらう
 野童 野童
 花れ 惜もうけあふらんや 女あま
 尾頭 尾頭
 野明 野明

ア 四

花着たけさのひ切れあきさのぬ
 柴河 柴河
 花れ 惜もうけあふらんや 女あま
 尾頭 尾頭
 野明 野明
 比丘定 かまらうしおあまのこすけの
つあはは織あふらぬひ
 百里 百里
 胡故 胡故
 荊口 荊口

芭蕉庵のるす

ままのちのりやちり柳
 神くりや比良て遊つく帆舟
 けりりのなれつとさや奥乃棚
 けりりこれ曝しや一秋のあま
 木啄の入まりり夕架やぬのま
 日當よせくろりなるすうつり式
 くるまよあつとろりれてたうつり
 粟の焼れひくに入らうつり式
 せ新しものなつとろりぬあうつり式
 ちりりよわつとろりけりりけりり

桃隣
 木節
 惟然
 平水
 丈艸
 正秀
 卧高
 惟然
 正秀
 惟然

ア 五

ち辛府と通るうらなせもの
おほく集りて稿こまきうらなせもの

一ねこのゆりてねせぬを下成
 ちりり

ち辛
 外七

うまの人の油引やうるや一ね
 ちりり

其角
 探志

ちりりの産二と
 本はは直りて
 川をれつとろりかゆら小麻うれ
 膏の火を後ろつとろり麻のたのま
 ちりりて目さしとろり麻のちりり
 ひさつとろりつとろりちりりちりり

半銭
 丈艸

かへせとらにほくらちゆれ小森の

彦根

汶村

西塔小倉一と二句

唯星や尾とよほふ志りのささ
いよむひとあけしちとや麻れと

曲翠

蘇葉

秋日游小倉山同詠鹿角

振あげてさほよらや麻れ角
諸角に月つとまきと出麻は
麻とてや角とむけく志のひと
たきあふ角とてなりや女麻の
鹿麻の角ふとらすすよと南

野明

来儿

荒荏

閑父

為右

外まらや小森よらと麻の角

去来

あつととも志のきつげと楡乃花

遊刀

禪つのはらとむじと楡乃花

大夜 芝栢

出あふや楡の四つとれとささ

露川

なす月の末大井川と

いつらに楡をすけ流や大井川
粒のこのひとやる 咲楡らぬ
楡村れと花とささとさすめ此
楡つとらとささうらやも門
なす月とささうらとささうらとささ

其角

支考

孤屋

史邦

智月

粟畑此奥まきくあつまこ入目これ
 昔清く盛つるをりりそこの花
 狐火の——けこるやそこのま
 口取も嘆きまきく約むよ
 京うさハ皆弱者のをとりなり
 一番よか——まこくをを分
 ここのむ——れまきく——まき
 日より能なる——よの野分
 ここのまきく——まきく
 風の根をとりまきくまき
 電の切まきくまきくまき
 待をや流浪のうこれまき
 空芽
 雨汀
 荒蕪
 曲翠
 浪化
 許六
 句空
 浪化
 塵生
 卯七
 文鳥
 惟然

俳笑山中ふあひて

名月や花うしうして終くま
 明月は梅葉のまきくや田れま
 せふもつうてまきく月めま
 名月やまきくまきくまき
 めしつやまきくまきくま
 名月やいろまきくまきくま
 明月やまきくまきくま
 日しうまきくまきくま
 娘な内まきくまきくま
 名月やまきくまきくま
 明月や里れ白ひのまきくま

芭蕉
 全
 丈草
 江戸
 大木
 彦根者
 如元
 正于
 野音
 茨山
 利牛
 木節
 木枝

不破の宿小寝く

月斜しつらふ宿しつら月見えぬ
明月や向くの寝やてつらつらめく
明月やささ雪の介此坪乃うら
飼養も峰あそむ乃月見えぬ
明月や坪よよぬしつら坪の塔
名月よもつと決て中ぬしつら
仕立もく寝よハ寝せの月見えぬ
明月やつらつら寝乃依客
月影小くの鯉泳ろ小橋畔哉
豆腐やつらつらめく月のセツあそ
おろしつらつら月乃水見えぬ

如行
去来
野馬
残香
九柳
野童
山峰
浪化
新野村
宮城氏
廿六
牡年
智月

やうむつらつら指のひつらつら

野童

つらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつら

野高
正秀
風姿
丈草
子川
伏水

秋もよやうくんとちうけぬいなこ
 すくむしうきらひしるふくちん
 せいひしうあまし海をちうけ
 焼酒は虫もよしぬやひんのか
 ちうけしう完おもなうすまうり
 菜留のしうきやあまのる
 菓は書ふなくや山家の古上戸
 黄も糸のすまきひしう菓のま
 梳くこれしぬゆるちまきこれ
 菓の花んふあかかろしういふ
 蒼浪よのしうきんりのきんは
 九月よふとせしうやちうり
 待彼

風園
 堯欣
 兕觥
 藤華
 文州
 李由
 北査
 支考
 李由
 可南
 嵐雲

松茸やぬことちうしうか
 ちうきんしう遷るをましうしう
 ちうきんしうのちまをねし
 しうかむしうひしうあぬはれ丸
 あしうしうちうは林てぬん丸
 ちうやこれ大焼もほしうや後の丸
 菓は書ふや目しうしうひしうあぬ丸
 ちうきんしう海をちうけ
 焼酒は虫もよしぬやひんのか
 ちうけしう完おもなうすまうり
 菜留のしうきやあまのる
 菓は書ふなくや山家の古上戸
 黄も糸のすまきひしう菓のま
 梳くこれしぬゆるちまきこれ
 菓の花んふあかかろしういふ
 蒼浪よのしうきんりのきんは
 九月よふとせしうやちうり
 待彼

之道
 八葉
 斜嶺
 野高

秋の夕一日の光りしきみちる谷

長世
田上尼

の巻

船十里八重の燈りり 紅葉谷
流転や金魚のくちりり 此の秋
空巾にやぬりり ねくり
り 柿のきりり ぼりり 給り
り 柿をゆりり ねりり け

全
魯可
呂風
呂國
牡年
史邦

冬

古郎よさひ枝あり 初りり
いさくひは根もなき市れ 時ぬ式

荊口
正秀

暖湯山よあそび

字活来懐京へりり 運てりり
ゆるりり ねまーりり ねりり
ねりり ねりり ねりり
やのねりり ねりり ねりり
ねりり ねりり ねりり
ねりり ねりり ねりり
ねりり ねりり ねりり

曲翠
之道
知行
文艸
李由
浪化
去来

ゆふくしとるふなりしる時ぬくぬ 田高

芋ありは男ハやりぬむし 風國

門火たきたりふやむれし 閑夕

秋衣の持し 平水

五穀は 露川

芭蕉翁の七日くもつりり

あしれと於やみ店に偶若

してさうさすすられぬまま

日くやうし

胡やあや茶湯のほ乃 文州

うし

新まや人参つんて墓ま 云来

るの息ほのふ 江ノ 民丁

ちんれく 大坂 素龍

ちんれく 大坂 春舟

雑水の 江ノ 紅朝

け里は牛の 木枝

こ 赤中 夕北

さ 林紅

本枯乃 其繼

芭蕉翁の送葬 其繼

さうし 野明

こ 野明

風や田 木導

こころ〜や明早めれて三保の松
 空芽
 春もぬ〜木の葉おれあつた社の庭
 八条
 むらさち〜やの木の葉おれあつた
 氷固
 昔よたつてあつたこれや燈のこころ
 野明
 あ〜こころのつ〜川粟のいこ
野明二年一歳 小五郎
 せん〜のこころひさ〜の燈のこころ
 牡丹
 る志〜あま〜のあ〜
 曲翠
 舟〜うれしあ〜すりせう〜
 萩子
 枯あ〜や何よあ〜の燈のこころ
 馬沸
 丸な〜月よあ〜き十夜
 越十
 壽仙
 小倉の常寂寺〜
 雨傘海やあ〜の月やあ〜の友
 荒花

所山忘〜ぬり〜のあ〜の山
 浪化
 夷譜〜料理〜のあ〜
 曲橋
 大空〜のあ〜のあ〜
 嵐青
 昔々森の茂波〜
 本葉
 ぬ〜き〜のあ〜
 本葉
 舟に福〜のあ〜
 本葉
 そ〜こ〜のあ〜
 本葉
 炭のあ〜
 北枝
 舟のあ〜
 傳
 炭のあ〜
 滄波
 炭のあ〜
 大
 温故

口焼や吹草ありの酒のうん ミ 竹戸

酒のほろけも社おしめろ

うらまのほろけも社おしめろ

うらまのほろけも社おしめろ

口切や海舟の葉を平下 イカ 正秀

くろ切やこや イカ 本導

若う イカ 岳峯

埋ち イカ 波村

埋ち イカ 許六

お 大坂 徳助

酒 大坂 秋風

雑水 芭蕉

杯 正秀

新田 昌房

白丁 支考

平爽

桃隣

斜嶺

之道

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

李由
 乙品
 卧高
 魯町
 此節
 舍庄
 大坂
 石
 正秀
 支掛
 惟然
 祐甫

士芳
 芳本
 卯七
 胡風
 大草
 堀江紙
 玄来
 浪化
 琴島

春うけく藤のさやうらうら
牛乳子の角や待らん
若葉のや夕日ふつく
は白のまに白ゆり
浪化 荆口

笠人よあつこよもまひれ
芭蕉

春

むつろりと涙の枯木もあまき
若くしや風とらまきき梅は花
種まきき香ふさく梅の思ひぬ
梅うれみゆのそり終まやめ
梅香よもつんて反や折の鯛
寝高の坂下にうにとまのあり

香ふはくりにゆる星は梅の空
梅うや風を巻のそられ一たより
むめうきやうらうら軒の眩
芭蕉 浪化 越中 夕里

掃切く梅くききひろまこの乳 涼葉
 梅くやあまをわらう村の口 呂風
 去くるいき松まもきむ先れ葉 如行
 空ぬきて魚流よこるお梅其 素覽
 よ水場のまよほのくし梅のま 嵐書
 梅くやまよこひまむしれおら 荆口
 ちり志海やうせうも里の梅花 許六
 竹葉戸たあけちこ梅つや梅の乳 夫州
 ちり梅をわらうぬむ先のいき 桃華
 七種や唱あふくめる口乃うち 北枝
 なしく玉鏡よなつおれひき 我峯
 殺しくハ女房のせこのたつおれ 風賦

嘗れ小うりきなりややぬ花 儀房

別支考

雪や露をよとりの眺 詠
 化粧とら果ややまれを猫の糸 史邦
 猫の急流乃おくぬ斗なり 風國
 糸る松を水のむ猫の別れ 川支
 昔戸中よささえのうらま田 丈艸
 是よりくしとくしと海乃 支考
 出智や酒の史乃名れ 路健
 山をよと小松の残る燧野 洞水
 やまよりれ焦を化を 支考
 暖の雑子にさめ 関河

やまうしつれ夕東さやきしゆのあま
船まなくやほろりいづも浪の上
子をつましくゆふぬりむく船も水
ほろりいづれつくなつや本丸のま
露川

源平の古戦場をうらひて

ま庫ふつし

便船やさいきたれあまも塩くりり
にぬりいづれまよ入しやまを産うこ
あまを産う産うけしあまを産う産う
あまを産う産うけしあまを産う産う
卯七

あまを産う産うけしあまを産う産う

層れあま産うくと何百里
支考

波先や勢田の水けり鏡月
嶽よふしや細場のうらむと貝
をるやあまのまひりまよ小大
るの尾よ陽をさけりやまを産うこ
のけりいづれまようらまあくのす
陽をさけりまようらまあくのす
陽をさけりまようらまあくのす
曲雲

老鏡

九月より春まで花乃を松
えぼしりや里に梅さかふつとよ
あみの海ふ橋を産うてまげふり
大佛やよらうのまなうい入の川
不玉

風麦
食品
利牛
不玉

祖の躰をなうんやれよの舟
もつちふらうてきこもて柳うれ
あしつらやうたもぬる経の柳は
侍まよ小さむい雨のあしと死
楓風

様をとくたし経とくちよせぬも
しれはぬぬらうのまれこらよ

花よ経ぬけよとくいう氣の果
所尻も山をうけりもれ遠
一本とくちうらとくしれ又うれ
花又よもとくせぬ里の太れま
ちうつらよをうらとくしれ又死
喰あよ喰入やうもしれ又死
古 嵐南
正秀
浪化
大州
芭蕉
去來
採芝

寺中花

小坊まよとくしれとくのくたえん死
ぬりまよたよのまうあしつら
あつしつらまよやうらまらり
抽干やうらまらりくせくたのま
花の中ま世をうらむ入日うれ
も追くたつらうらりすまらり
うらまらりまのさうらうら門の境
赤らうら二日おしきぬめまら死
赤封切る赤下のはつとちら
東叡山
ハツとつられらうらやうらつみ
其角
其端
未ル
史邦
出水
卯七
怒風
風睡
市
皮老

白枝のつらさのなほしく

悪僧のうらさるあゝや山はくま

ま白の本取ておろこま様

おせらささうのあまこと様

松芝花とあれ縁のほろこま

うらさるまきささうら

つらまのやうらうらしのほろこま

うらさるまきささうら

盆の中ふさふさせんつかす

山吹や水もこえらむむらじ

やうらぬさふ牛ね尾をぬる

みさる志けりてえらぬねのあち

野明

孤屋

尾頭

示峰

石推

萩子

為右

やうらうらにほろこまのあち

根のゆらうらうらと出ら

かひいしあまのこえらぬ

梅うらさるまきささうら

うらさるまきささうら

二月盡

何番れあてしうらや昔のそ

木枝

荒雀

文鳥

素馨

野童

夏

ば〜きん〜きんにほさん川むく
 時をニツの標を後り景
 何〜よん〜の鱧の志よん式
 頭の〜ふむせよや摩所の時を
 啼〜る〜人〜きん
 竹の子もひ〜お〜時を
 麦め〜時めあやあ〜きん
 小ま〜あふ〜るをけさる
 夫草
 惟然
 許六
 支考
 小枝
 李由
 え乃
 甚仙

白空法師の

〜

豆腐こもあ〜山をほ〜浪化

〜

ほ〜よん〜六界もな〜句空

花〜ら〜や〜雪芝

衣〜之〜雜巾ひ〜之道

裳〜ま〜ち〜一〜りひ〜呂風

巾の〜や〜凡骨やの〜朱迪

〜けの〜や〜は〜甲武者

〜の〜や〜は〜智月

〜の〜や〜は〜

〜の〜や〜は〜

竹の子れま〜人〜李由

あまのこころのよき花のうきこせ

結りたり

短く夜や赤紅いとなさそらに

快然

あやめ草の葉のようころよき白

木枝

大井川水物と信田塚平氏の

かたふとてゆりて

はしほのやまおとせ大井川

芭蕉

うつのやまあけ

さみこまや掉よふまぬる十巻子

左柳

あしほのよきとらりふいふこ

里東

まふふ糸の早もやみあえ

遊舟

狭くしるまのるめらる田植

示蜂

雪の草や曇りりれ足やと

荆口

たつやれふあきこころう

鹿也

糸つとや夜の重葉の曇り

苔蘚

水うらやみふらふあきこ

回見

蚊の中をたたくひり曇り

南文

落川と筆とや

水鶏たたく人のとや

芭蕉

くまのまはあきこころのけく

玄虎

うらやみふらふあきこ

半残

水れたやあき流りたる

去来

くまのまはあきこころのけく

錦水

片壁ふくやたのりや蚊のやう
蚊のやうに中ふいさうよまぬのれ
蚊のやうにやま蚊よむせる蚊のま

蛙弓
李由
許六

訪農家

水乃トトとまるとのやうに

野明

うー

窓のよつまけけの蚊のやう

為有

妻とくうなひまらひ

振下

北去

子とねやうに蚊のやうに蚊のやう

不玉

うーと源とくうなひまらひ

韋来

精つうひのまのれ床や蠅のま

史邦

日のうけをさうして蠅のさうと
昔一さや世まうけけの牛の蠅
町幅のいんさなうりら架京れ夜
あつりううううの蚊のやうの亭
けいさまきまきとくうなひまらひ
月代ふゆめとて花の蟬のうい
はく小窓とくうなひまらひの蟬
障とちや蚊のなうのいぬとすま
あの蚊やいとせまよ合せらんの
そとふとたなるほとまをけけ
さうとくうなひまらひの蚊のう
さうとくうなひまらひのあせほ

近晋
九節
孤屋
森隣
野坡
正秀
向空
子珊
智月
乙及
以節
支考

夕光 夕光
 正秀 正秀
 游刀 游刀
 雪芝 雪芝
 牧童 牧童
 野明 野明
 遅望 遅望
 探芝 探芝
 怒風 怒風
 魚日 魚日
 遊糸 遊糸
 卯七 卯七

夕光 夕光
 正秀 正秀
 游刀 游刀
 雪芝 雪芝
 牧童 牧童
 野明 野明
 遅望 遅望
 探芝 探芝
 怒風 怒風
 魚日 魚日
 遊糸 遊糸
 卯七 卯七

うしろりふいらし喰り草花
たしりしや一掃つくはくし竹
磯まきまやまよとく舟の目お式

淀川豆舟

浦くぬりしりふ真なき板う形
かきむしれあとうりくこは三葉
種麻やくらりり小強るやけ島
やひあきの額ちりしや麻呂巾
おりしりも田草の敷又ひり進りり
川物や村ハ市着れ敷の海
る柄敷を岩子割逆は清水の乳
先るれ皆志あり以清水の那

史邦
空芽
惟然

風着
浪化

全

壽仙

如行

嵐書

野徑

猿雖

あうあしと粒口きよる清水也

老慵

昔志しりし海まてありる涼も式
葛布せきさうりしれや夕とくえ
あつしりく涼やせいのまあれと
とましまるる苞丁きしすのこ縁
すしりちやおつてんさるる生鰯
凡しりし猿也しりし心れ縁
出題のおされしりしちや夕とくえ
すしりちやうりしりしハ行しりり
里の子れ葉おのしりしすしりれ
所川をりしりしあしりし縁も式

許六

祐甫

賈山

亀水

其継

卧高

洞木

仙枝

里東

万乎

世芳

芭蕉庵小文庫

お筆の情もあやまぬくまの草とてこれらもこれ
まゝのむね一かゝるまゝ一かゝる塚の塚をたすゝる
凡雅を比恵目良れきよなる一かゝるむねひぬきと
むき一かゝるぬきなる一かゝる長溪寺の禪師ら
亡師とて一かゝるむねのむねのむね例の
杉風かの寺ふひひの塚をほくくはくふふ紙乃
やととてむねききなる一かゝる土中又酒めけ
塚のあり一かゝるむねのむねのむねとて
せく情もくくひひをくくふれ師の思ひと
きくゆきく一かゝる箱をくくさくさく一かゝる
形は石牌をききてまぬれのか芭蕉をくく一かゝる塚

芭蕉庵小文庫
お筆の情もあやまぬくまの草とてこれらもこれ
まゝのむね一かゝるまゝ一かゝる塚の塚をたすゝる
凡雅を比恵目良れきよなる一かゝるむねひぬきと
むき一かゝるぬきなる一かゝる長溪寺の禪師ら
亡師とて一かゝるむねのむねのむね例の
杉風かの寺ふひひの塚をほくくはくふふ紙乃
やととてむねききなる一かゝる土中又酒めけ
塚のあり一かゝるむねのむねのむねとて
せく情もくくひひをくくふれ師の思ひと
きくゆきく一かゝる箱をくくさくさく一かゝる
形は石牌をききてまぬれのか芭蕉をくく一かゝる塚

此松子、形を記せり、一とて懸揚なり、故あり
たましくし

史邦

口乃、氣の、かゝる、まゝ、一、さ、う、好

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

小文庫

多之部

上、流、田、の、宿、を、て、
宿、か、り、し、名、を、好、め、し、は、時、雨、哉

旅宿

く、山、時、を、あ、ま、さ、し、れ、は、^{タシホ}、
兼、河、岸、で、ま、り、種、田、れ、は、山、時、
雷、お、山、家、松、は、れ、み、く、秋、
會、さ、ら、ま、り、一、何、村、の、
板、壁、や、馬、れ、孫、ぬ、り、小、夜、さ、く、

山店
嵐竹
本草
去来
史邦

雑考

かきやとびつらばはにふれおころし
ほくげとやとまの山乃九十月
城山ノ雉ふおりり小六月
まこと穂小千香時と初月ち指
えり菊の野武まも任をわ小望田
薫物のとれてやうはり枇杷の花
下新の敷されいぬりはをれ花

嵐竹
史邦
山店
史邦
全
全
養浩

大通庵のま道園居士芳名を
とくしききしはましく戸ん

えむとぬらとまてはぬふ
その目をまてん神を一夜の
まてぬぬりぬたをまてぬ
こまぬぬりぬたをまてぬ

其ころえは名枯本乃杖の長

芭蕉

蕉庵師の像の謁

芭蕉會々初り初 像を前
達六會やまの食れ一文字
水風多をぬるり通も十夜ぬ
浄命講や油乃やぬ酒五神
上人の鼻ふくおま浄命海

史邦
全
全
とや
史邦

惠は美講師亭いさほむせりる
まひと備あもむと鴨ふぬよりり
まの川期と字をさるりあはと海
玉あゝと百人前きおろりこ
清島越内体め客が一ざり
檜物屋もるふりせりおろりに
松とさゝしき所た庭の松の坊
おろりはしと馴て能あるまをむ
おろりくとまもむしはくまをむ
まをぬりそれさあしや鴨のしと

ゆふと世をむひて

芭蕉 利合 史邦 山店 嵐竹 養浩 史邦 惟然 種文 丈草

裏のほたてしと鴨火桶の
火煙よりそれより比ハ板中へ

正秀亭當座

革羽織ささやくされて火煙式
風乃あゝとさるりやこぬ柳
あゝしと此敷ささむれ小窓に
風やささしとぬきぬきささ
お川や木乃葉の黒き岩れる
まむ坊ふしとむ入る生海風式
厚鴨やとらひぬきぬきささ
毛衣小流ささしぬきと鴨は足
雞乃片脚流ささぬきとさるり

芭蕉 聖芝 史邦 丈草 残香 紫芳 惟然 梨雪 蘇人 芭蕉 丈草

金屏の松をぬくさよめくさのり
小屏風も葉を換うくさのり

芭蕉
斜嶺

旅宿

大名此程なる中も病もぬき
猫の食干ししてありさしはね
取神も遠く喰ちめぬさし
葉をきこむ度葉をきく吹雪
留主のまふあをさしはね
甲を干して何さしや細紙子
子糸や梅ま川 宿の赤豆食
子糸小目費はるさしはね
餘密棋吹草ま川やはるさし

許六
山店
史邦
支老
芭蕉
史邦
山店
史邦
下風

忠実よ水のませたり神さし
埋入の門をさしはねくさ
くささしはねくさの上
神さしはねくさの魚
さしはねくさの魚
鶴鶏家はさしはねくさ
後乃さしはねくさ
歩か淡聴を
嶽くや鳩さしはねくさ
細豆さしはねくさ
さしはねくさの魚

智月
許六
芭蕉
全
全
如行
夫草
史邦
史邦
史邦
全

其梅の目と川や山やをるれを
 多仙乃花の言これ日く守りぬ
 くらをや宛然うらの丸す五分
 あり態の寝首うしてももぬりぬ
 丹波路やいあくまうちも悪を
 月ともの思ふ科まきり寒の入
 まるまや山伏村乃長ぼく
 一ぬや相場の六丸まきり納
 身代と筆て志れりてくおさ
 金三事一もはくくしりてま
 山くれても忘るれさくんぬ
 莫言乃んもまきりぬと一ワと

土芳
 智月
 史邦
 山店
 嵐竹
 芭蕉
 仙杖
 嵐竹
 史邦
 山店
 芭蕉
 全

さうとらりや一筆むてく
 うらうらなふささきも市北派走式
 蛤のいけぬうひあき年の書
 さうやこや嘆息をならぬ
 若人のいりりおろてさ
 酔うとて密棋も年の名跡式
 いせゑひとああらきり衣配
 餅肴小後半とらり療痘やえ

智月
 正秀
 芭蕉
 探志
 乙州
 之道
 史邦
 全

石白之讚

市中小まきり信
 き小き乃始をよくとぬらりも

その終をこころする事ばりし
高山竹林の猛士をなむとぞくはく
寛平華山の上白土も後くもさし
ゆのしひきまのこはをさつん終ふ石
白のゆい山乃く聖一匡師ハを
もつて肉身をや一たひ法身を
まが民家なりハまのまが列の
しらよりも夜こそあまふふる
ましく片時もさしはらふ事ば
もあつとさく論をぬく役の
優は安塞のなの中不からきて彼
そらひを道引切の上よまら

上と下しぬし山なりはカキ
さ終者のこと免ふ専なりハあまふ
り世同ふまて慈よりおさうんぬハ
謙しそふ事の調くぬふあ
とやうさも黄姉れまふれ
さうのまもぬくぬく
梨さうるし目やうぬくぬく
うはをを荷ふ老ふぬのさふて
あつしとさ終るすしとらち
まを李れく剣を塚さくぬく
し山をさくをぬくぬく
あまふるさうとぬくぬく

形しあこむしもの心をみこはく
のちりたしこもや月こり乃ほ家
申ふう海のうきまは独をとおりの
髪とほく絲甲しうり佛れまう
とともはらとほなるもあてら
こころとそらうん扱こころかふ
そら亂とこころうん扱こころかふ
仕きううるるあま事きううる
やいしう扱のじつしこ前のぬし
うぬいぬあまも唱歌も古代乃ま
あして枝きこころあまも志ま
歌く志ハぬとあらふりあうる

其にうらま

机銘

間ちあけけいあいちをりまろ略馬
吹嘘乃まをやあけし志けのぬし
あまの書書を扱そあまの聖意
あけ精神をらまの静たあま
こけあまをさうりて義素の方す
入たこころあまのまのま一物
三用をさまをく高き八すあま
二尺兩脚ふあけつ地のぬし
卦を彫りて潜龍北馬れ貞小

おふもきとりきく一用しむや
まこと二用しきんや

毎茶子永元禄仲冬芭蕉書

對門人傳

乞や女の煤小條しぬ古合子 芭蕉

煤掃え説

明はのくそよりおのはくしくし
泥こおれをふるまると言ぬ
をしきしは師をのす日す
もこのしぬぬぬりりやや
の格式九重井町の法はか例あり

事ありて誰なきくの人乃とく
もく辨しきいと面白き説ゆ
門くくこびて奥の神く回
戻風りりくひぬく火鉢
茶をとりまて廻る帷子乃上張
凡そとて又くくぬは後もい
りむをぬれ日くをぬくや
通りなりぬれ庭の隅調を
ともささらしぬぬ中しよ
持佛のうしりむいぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
やうぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

冬はふと日候へ入るにあや
味あつたよりの大男の袋うり
暮さうとぬものつゝうみ米標乃
サコららけき組ちりせり燈
ころりえていふをを贈あさ
はきのうのふたやふのい
の播らぬやうなるぬみは
なくききてさういひぬとハ
な

とくはるやきり宿れる野
なく終てるれり終りり
山店

とせと

扱おうこのはりあふ人すりて
まことけりくしをかたりがぬ
凡そこれく家間を月のうま
毛斐参のふふのこゆね塚う
アワのぬむいには平野久法寺
丈一ヤとと味増つをせま
昔は場であらえたる岩吹竹
くおけり凡のあくぬ山さ
松苗れえん林のさふ一里鐘
田う屋の苗さふ炊くはる
夏の月いぬ首首は深へあ
さうさぬうしてぬとらり

史邦 嵐竹 養正 執筆 店 邦 浩 竹 邦 浩 店 邦 浩 行

篠原や黒川の山をつづつ
 馬をくくえてある如顔を見る
 何れもなく酒毒が出て取らぬ
 年子まらびきだ董みさおれく
二 赤築地の言も聞くり新在家
 家て垢く水風呂此婦と
 女をありりまららぬ子り地
 女をありりまららぬ日入る
 意人のい流く好まえて居る
 文にさいてほらげらぬまきり
 盆あいま歩ふもつきぬ小娘見る
 隠さすく家の月を又るぬり
 邦 竹 浩 店 邦 浩 竹 邦 店 浩 竹 邦 店

槿乃川をさらるをと踏あるまり
 篠原くくまられ鷄がくぬり
 まられ乃山れ鶴うはくまらるり
 千日谷乃 銀杏あらるり
 流ささともまて志めこ流組屋者
 追く留まるをみよやらぬり
 いらくと星のいらく横まらぬ
 野あらるもられ椿新田
 藪山岸まられ櫻れ咲出て
 夕日のみ助よ胡蝶むららぬ
 分別れをまらるりりりりり
 芭蕉
 邦 竹 浩 店 邦 浩 竹 邦 店 浩 竹 邦 店

小文庫

春之部

年々や猿よこせと乾猿乃面

芭蕉

皆れ海をよみをうて

二日世帯と吹入

大津絵れ等のほしめやち小佛

全

ゆきこれ札幌公衆ハるぬうぐい

もつていふみいりうらぬをい

まらぬひぬまことせ路のたりの

藍いこりうらぬとほり入る

と真一やされりる本るれ松屋

紙乃菅蓑了葉の杖はさま

自畫の像世志あしくきけあ

荒路の家五雨亭小遊者

や小付一所不住のうと見え

下し猿をぬきは解のあ

況おくあるを月をよ情おこ

亦家付はささうきと月をよ

とて生前のあうまうと

まをううう人乃こむ月

とんりくの世本のあけ

めく例よりちうれくか

ヨウの神... 史邦
おれ... 史邦
若葉... 嵐蘭
一... 尾頭
根... 史邦
一... 山店
一村... 史邦

い... 史邦
吉... 史邦
菟... 史邦
寺... 李由

ら... 史邦
ゆ... 史邦

鞍馬金銀...

む... 全
百... 千川

山崎...

志... 史邦
世... 芭蕉
の... 史邦

入葉ししつれしつ常はてし
とこやしあるまゝこのほおてし
なすぬ

春水満四澤はまきま

川柳多しうこん葉葉口
ま柳乃ゆびく魚形錦つふ
川越しつ草とまふより柳ふ
泥亀下人きうりしつ柳ふれ
ま柳とらふふ動くやをうゆえ
馬奈の下くまゆり柳うふ
ま川よ吹出されり水は胡蘆

山店
嵐行
岱水
可長
史邦
里倫
去来

いあらし風ふあはさむいほし
草花中退多むれむはしつふ

白良

史邦

苔清水

凍りきくふふ汲りふ清き水

こま

水

ころぬら木下小くれま下く水

全

鞍馬

僧正の谷をよむるまは餘きや
黒けこの松のそくちやまは緑

野童
上芳

呼ぶいふまてはうらや猫の妻
猫余も列のしぬし猫乃意
まうと死にやうしときさる猫の妻
史邦

南都

まやれやうもあはふ乃相い
こせき

二月堂取水

水とらや氷の僧の沓れとや
味暗まふの契れふほひや鏡月
蛇まふしきりけおとるし維多
史邦
芭蕉

多田の沙廟小詣

いとほひもさふ小祈れ終る形
史邦

柵去之辨

ほろいほこのま小やあつた
こせき

あししころうれあふとて楯所
とりあつらるるまこりし
陸月たしきふおまぬ風雅を
よしやまもくあして口をさ
むしとれハ風情箱中さこせ
ひとあつらるるや風雅の魔

かたなり〜なまを放す〜
拙を去腰〜ちり百錢をさく
ほく〜柱杖一鉢よ命を能く
な〜切り〜風情終ふ荒をぬ
らん〜

重雀うり上ふをもら小涼うぬ 芭蕉

呂丸追悼三句

重雀ぬくあまれ〜うぬ名くらり成 會覚
ゆ〜い〜ちりも名跡や世をの代 去來
野〜く〜ちり〜く〜つ〜て〜俺 自 史邦

伊賀新大佛之記

伊賀の西阿波の庄〜新大佛と
以小あまゆ世〜ちり〜此都
東大寺乃〜ちり〜後京上人を
旧流なり〜ちり〜 舊里よ〜ちり
ちり〜旧女宗七〜ちり〜無を〜ちり
ゆ〜ちり〜ちり〜ちり〜か此地
あり仁王門撞樓のありは右
草れちり〜ちり〜ちり〜松のい〜ちり
東〜ちり〜石居〜ちり〜す〜ちり
〜ちり〜ちり〜ちり〜ちり〜ちり

ひびくむらさきをいへてく蓮花基三
獅子のくまをいへてく三苔れ
あやを乃こまをいへてく三
たの山岩窟小あまをいへてく三
朽苔を埋まをいへてく三
さやをいへてく三
はくもをいへてく上人の形をいへてく三
めをいへてく草堂のくまをいへてく三
直をいへてく海小あまをいへてく三
はのやをいへてく上人の貴をいへてく三
たのいへてく三
て説をいへてく三

ぬる

夫六十一陽をさるる一石れ上

賀茂一あまをいへて

照はく日やけうよれをいへてく三
志こまをいへてく苗代馬のあまをいへてく三
千刈の田をいへてく三
川流や流をいへてく三
あまをいへてく三
ころるや渾雞向く三
引鳥の中をいへてく三

史邦
山店
一登
猿籠
荊口
遊心
支考

ついでに虎の中よりと川橋 芭蕉

三月三日埴井海老の巻

胸透りて須をさるゝこむ汐干式 史邦

乃何れ帆の浪路を好れぬ埴干式 去來

唐海ゆた枝をまれしゆ家汐干式 山店

さしこ言りし語

一日此日をまゝや松のひま 史邦

孫州甲山

上代のまゝ目もまゝさうぬや山 全

お習やと衣ととむりまお快 許六

下品の情

あさつゆやうらとを安ん行結ひ 史邦

下くもこお居ぬとすめぬ蕨 山店

馬よまや畑の入なる桃柳 北観

梅はがれ是も春一屋おちる 山店

お教ふ居て換ひしるふ春椿 全

旅行

肉庭をえせうけふりり白ほく 嵐行

堀記をほくしれぬおや蟻のまゆ 音彦

夏斗月とて草吹入の葦草 山店

難波少く

海棠やお八州くらおれ草乃ま 史邦

僧支草より別

懸蕪よりみりりれや若乃泣 全

百日れ小屋も又りりり百子鳥 嵐竹

西の像讀

呼子鳥やうく。難水れ盤根石 史邦

ゆきのぬり目き

はじくやあまは津日くられま 小

芳野

花さうり山を日ころれ河をほしき 全

損ぶしと食たうせりり花 山店

花さるやちりりや隣のあおれ山 去來

らう道や木のもこ通敷り後さうり 洞木

村中くあつ下りりりりりりりり 養浩

系清もたえのとなまハ七を清 芭蕉

さああ多金王様くられよりりり 史邦

菽臨ふ衛門様れいんめいり那

山店

三月盡

赤猫乃いしんてくたうりぬまの音

山店

刺着布はあまの緒がほくまの音

史邦

水風呂の魚がぬいぬいめく音

史邦

三吟

史邦

櫻えぬ袖ちりりや田舎染

史邦

麦の申うういひぬきどく

山店

ふみふみの猪も持ててぬき

山店

お川ぞりとおまの月をぶい

邦

堤焚一のさくらさくらなれ

店

ハ秋れさふれ刺ふほく

竹

湯の流されするいぬ

邦

種蟬乃いしんてくたうり

店

とる川と馬を引とて

竹

恙亭よふ月後れをうら

邦

けし難もいなまごぬ

店

とる川と馬を引とて

竹

お好れ月乃さくら

邦

あまの音を腰ふとて舟波

店

六帖しんてくたうり

竹

花のよき縁日ほろり掃くところ
 郡 邦 店
 源路く河のあけ春去る谷
 郡 邦 店
 二 ぶつ川でも皿の持ぬ小滝廻
 郡 邦 店
 寅昔中さくくくも夕天せん
 郡 邦 店
 言うまきくきききききききき
 郡 邦 店
 山をいふ茶屋もきききききき
 郡 邦 店
 本堂を右へまわれば反歩まて
 郡 邦 店
 ころやいかに狐くねぬく
 郡 邦 店
 十五夜を鳴らししころ西乃堂
 郡 邦 店
 箱らにきききききききききき
 郡 邦 店
 行藪の鴨上戸ころらききき
 郡 邦 店
 又きききききききききききき
 郡 邦 店

八専あきききききききききき
 郡 邦 店
 庭でいふ松や小笹のころ所
 郡 邦 店
 返事おきききききききききき
 郡 邦 店
 梅くくくくくくくくくくくく
 郡 邦 店
 やきききききききききききき
 郡 邦 店
 景れききききききききききき
 郡 邦 店
 帝也鳥のころれり梅きききき
 郡 邦 店

花乃雲隠は上野、淡州を
 芭蕉

小文庫

夏之部

文字の指石

あよ乃郡一れこの里とや文字
まらこれ名あとして方二間にありあり
石あり此石をむう一女性物ひひ
石まかりして其の面は文字まらりり
うや山藍掬みしてあつあつと意ふ
しきくおほくよあつあつと谷
念ふ埋れ石れ面は下さなり
あつあつとれはあつあつとれはあつあつと

あつあつとれはあつあつとれはあつあつと
あつあつとれはあつあつとれはあつあつと

くまは

早苗とほひのあつあつと

前虫とれはあつあつと

一川殺てきあよ自らうり衣久
あつあつとれはあつあつとれはあつあつと
灌佛や釈迦と提婆八はあつあつと
今 山店 之道

落柿舎周居 強味日記よえと

ほくよん大竹教をりり月也
とせ

郭云鳴や御有れさふこり
夕やまやなりしとまにけり
かゝきんまゆりし首丸森まで
夫草
山若
岱水

おまゝ一鳴やうれんけり
史邦

あゝ

ほろりともちりもやゆひし
史邦

次

月さるくもおだるるや次十の夜
今

佛頂禪師の庵をゆく

本はるも唐を破りてさるる
葉はらや子体化のみまむく
核のやま川ぬきふりて葉より
太鼓めくほりて返に葉撥り
狭道はるる諧あらく葉より
菽時や穂まきやくぬ一は丸
かゝるる乃鳴りて星一枯のた
山標やりのまふれりてさる
ふふきりしつたゆむぬさる
よを馬れ古よの何ちりて紙のけり
今
史邦
嵐竹
史邦
山若
史邦
山店
史邦
荊口
史邦
北観
乙州
嵐竹

乙列餞別

花菱丸秋多あまふりとも 山店

落柿舎果居 暖味見たふり

抽乃花ふじくまふ料理者 とき

乃くゆく

巧の川く 梧あかりぬやあし竹 史邦

五月るや 蚕り川あふ葉乃くま 芭蕉

無病さや おうらうらく五月五 史邦

こころちれぬ 経もや川さ周 山店

川あふふ 狐火さやほふく 史邦

果橋や 山衣さやまほはゆらぐり 養浩

只おらぬ 交れらるるや おま花 山店

間不容髪下くし事

けくまの 都合さくろあめの中 全

おぬく

さくさくや 尾越れ鹿乃ゆひ物 嵐竹

巨く

草ゆる 蠅取蚊け身はくはひ 史邦

藪のむすぶりしつゝ乃ほつて式
一田はくしめくすくやめをきき
史れ食夏まきとけくや寺の留
新口

卯月れくく免唐お海りて
旅のけくれをけくけつて

なすの衣いまく風をぬけくま
けくきくハ蚊のちいさくをけき也
くふ月乃竹の子くけく木は
六月をきくめくけくや宮を下
東以

正成之係

鐵肝石心此人之情

けくくくくくくくくくくくく
けくくくくくくくくくくくく
けくくくくくくくくくくくく
五六十海老はわくくく一川
くくくくくくくくくくくく
中くくくくくくくくくくくく
連のきんちるやハ海老のみくれ
澤深をくくくくくくくく
麻乃葉のあうくくくくく
三日月れくくくくくくく
嵐竹

麻叶て風もちりそむけ小家うね
蠅歩小形影く雀老子飼う心
日れ勢やら影くくくく百合の花
鬼百合やうんとひいて蟬のうき
水仙乃種を干日やせむれあま
素け蟬まゝにたし急や暑さあま
鴨の子の芦根うねとぬあつた式

甲斐郡内をよめて

道行くふまの田干うこれあつたふ
あまうふれ二葉ようく影あつたふ
煤下れ日登あつたふ 臺所

斜嵐

河瓢

素繪

史邦

嵐竹

乙品

相美

許六

去来

怒風

旅り

瘦馬れ鞍つふあつた葉一把
窄人して東武へ下れ日
粟田とらうて

史邦

山本

とくかきまをよぬはうり形暑う那
とくかきまをよぬはうり形暑う那
乃砂

全

白空

夫山之像得二句

風うけり羽織ハ襟もはくろくろ
さうさほふ扇をうきまて涼

芭蕉

夫草

琴の引て去るをうぬせよ夕ぐれく又
箏もよ日くをうぬせよ夕ぐれく又
石竹ふ雀よきくくや砂むくくを
史邦 山店

ゆき

あゝ波や河まてく涼く入日乾 仝

鴻之臺眺望

切岸や卯花下く一文字 山店
安房の上総くくくくくくくくくく
うねくくくくくくくくくくくくくく
史邦 岩行

岡吊古戰場

山をの根れなうれより生れく雪を
南よみせくくくくくくくくくくく
ち山をの根れなうれより生れく雪を
くくくくくくくくくくくくくくく
や百乃秋の露むきひをわくつ
乃くくくくくくくくくくくくくく
のよらくくくくくくくくくくくく

いちまのりま松梅よきさかしのまき
つらねくわのりまのりまあひまのり
まよ時鳥のりまのりまのりま
なれま魂の胸をくわのりま
いゝまのりまのりま

幽冥れあまのりまのりまのりま
いゝのりまのりまのりまのりま
黒まのりまのりまのりま

首塚

首塚やとげまのりまのりま
史邦

首塚やまのりまのりまのりま
そ塚や人ものりまのりま

真間寺

真間山や茄子れ時まのりま
まのりまのりまのりまのりま
まのりまのりまのりまのりま

同所楓

日蓮まのりまのりまのりま
まのりまのりまのりまのりま
大木やまのりまのりまのりま

同継橋

継橋の田うらや寺れ男も
はさ橋や田草もうらぬ水
つとむのあとには田の水雞也
史邦 山店

帰路忠吟

ほくよん水う浦道も船之
たの空や情もおらん流し
舟梁もまらうらぬ
史邦 山店

餞別

山店

新交のりやまも先ぬ首途
まの相取屋れをけり
馬時の道て淋しき牧の野
吹ひする石をまののりて山
さくし一留者を引けり
躍乃在法をれもおんえん
盆をのり寺れ
蓬生よりをちめり
濕乃ぬきくれり
史邦 山店

丹波く〜使ふ〜く〜啼 蕉 店
 葦黍ふ〜あ〜ぶ〜利あ〜さ〜さぬ 蕉 店
 ち〜〜お〜土雲雲を遊ち〜 蕉 店
 き〜〜京中〜月也〜ん〜家 蕉 店
 神鳴れ〜ゆ〜り〜して沙汰なき 蕉 店
 志や〜〜さ〜る〜ん〜ぶ〜さ〜か〜か〜か〜 蕉 店
 真の院を〜が〜く〜た〜さ〜の〜と〜夷 蕉 店
 き〜〜〜年〜所〜管乃〜なく 蕉 店
 ま〜の〜日〜ふ〜産屋れ伽の〜ゆ〜り〜と 蕉 店
 け〜は〜り〜〜や湯漬〜ら〜ん 蕉 店
 い〜と〜く〜〜ぬ股之を〜在〜び 蕉 店
 月は〜〜も〜あ〜〜ぬ教〜少〜ぬ〜り 蕉 店

う〜ひ〜ら 標林は日〜〜〜れて 蕉 店
 佛の末塔を〜く〜む〜系〜〜〜〜 蕉 店
 こ〜海〜〜と白根出せ〜け〜〜〜 蕉 店
 ち〜〜ら〜草れ〜ゆ〜け〜竹 蕉 店
 羽二重れ赤けり〜ま〜く〜よお〜ま〜い 蕉 店
 け〜ひ〜時〜〜神を〜〜〜〜〜 蕉 店
 雞を〜ま〜こぬ〜ま〜あ〜〜け〜〜〜 蕉 店
 畠を〜あ〜れて〜山〜〜どの〜〜ぬ 蕉 店
 日光〜〜〜ん〜〜下〜れ〜秋〜〜〜ら 蕉 店
 ら〜れ〜〜さ〜の〜や〜中〜老〜事〜 蕉 店
 申〜お〜ふ〜生れ家も〜級〜建〜別 蕉 店
 お〜よ〜せ〜〜や〜〜〜〜天月 蕉 店

花のありうらちの神をよめしつて
散られし黒谷のまゝら
全 蕉

甲斐りし

り約れきよなつてしつちりり
はせ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

小文庫

種之部

し川秋やきくくぬし此歌の巻点
とを

吊物秋七日雨星

元禄六文月七日乃夜風を天よき
白浪銀河の岸をひくくして鳥籠せ
橋杭をなす一葉握をぬき
きく二星も屋敷をくくち
るくく音おもひくくく
毛糸おけくく一焼くく

おろしー 遍昭小町のうらたけの
人ありしをわすれしに井の邊を
魚星乃心をぬくはるる世に

小町のお

さる水ー 星も旅葉や岩れ上 芭蕉

遍昭うた

七夕よかきこみけりやー 宿舎物 松風
西風の南よ 橋やあすの川 史邦

瓜田関之説

色を君子は悪む所なりと伝ゆ五戒
のしるめおききしことおほく
捨るに情れあやふくふきぬり
くもぬはるる梅の下ぬー おおとひ
のか乃白ひよきしぬりのはれ
人目若園ももろ人たすくいのなる
はやまのうたうは出ておあまれ子
の浪の枯は袖志にぬきかたぬら
身むらうー おふくぬきぬら
老の身れりまむじさかすは
の中ふ塊をらうー おの情を

ついでに世のいふに於て小出で念真欲の
て罪ゆりぬるく人生七十を稀
たつとてとてとを望むる事
り何れ二十餘年せり免れ
老れあつて一社の名を
五十自六十年のいふに
よりあつて一社の名を
育て置くは一期を
免れを別れよ事をも
おろかなる者か思ふ
煩惱増長して一
やのは是れ縁を

らう世のいふに於て小出で念真欲の
魔界とて心を怒り清血におは
ましく生うと事まゝに南
華老仙の唯利害を破布し老若
をわきまなく用はつてむを老
の樂とけえん人まじり
各用の辨をわきまの業を
まはすことれもさる教
を以て杜五島門を鎖
あつてをなす一貪を
して五十の煩
戒と

あさるやちぎを鎖おはるる門の垣 芭蕉
 槿はほこりて木槿あはれなり 史邦
 寝道具はくさくさやうれ玉の家 去来
 乳母はあはれまゝに泣きぬ魂の家 山店
 夕べしてねむるも家もまはるる 史邦
 どのまやち後さうり乃袴ご 全
 盆をさして音周るる 虫のま 全
 牛部屋は蚊のままにけ 秋の風 全
 雀子乃寝巻も悪くやあはれのを 式之

不破あはく

うさ月や敷もさうけはぬはの園 全

うさ月や敷もさうけはぬはの園 全
 初草やまゝに日敷魚ぬ糸のま 全
 去らるるもさうけはぬはの園 全
 ひよりのくさくさなをさうけはぬはの園 全
 弓うさ先さうけはぬはの園 支老
 玉うさらなはぬはの園 史邦
 ひよりのくさくさなをさうけはぬはの園 史邦
 つゆくさくさ後世はぬはの園 史邦
 晴蛉やたのみの味あはるる 探丸

更科 曠捨月之辨

あはれはあはく、吹上とたぐはく

鴨川や月又は客ふりしあり
 名月や夕月よむうふ宮さうみ
 名月の西よりううたの坂をたつご
 名月や佃を越せばさきうたり
 名月や草花園こふ白き花
 侍の身をた後ありて月こころ

去来
 塔山
 如行
 山店
 大柳
 史邦

常陸しまうりる時

永中一うく

あきほのやせ七夜もは月見月
 芭蕉

堅田十六夜之辨

望月れお真なるやふら二三子
 いさめく舟を堅田の浦よとん
 其日申乃時こころふの某後氣
 成秀とつふ人乃の家たうり
 ろよわくた酔る舟在客月よ
 ううわくまありとあましくい
 よほよる思ひくさるおとらき
 ら後ろひて笠傘をまのたきを拂ふ
 園中よ草ありけけけの鯉射
 の切目さうくさぬとつく真なる
 きく岸よふ蓮をのちて其妻を
 もよ海を月けまつにけくもたなく

○
ち〜出湖上花やふ〜い〜い〜
さ〜く仲の秋乃るの日月浮序
堂よ〜い〜い〜を積中〜い〜
〜うや今〜い〜も於其の〜
とさ〜い〜い〜彼堂上を欄干
ふよ〜い〜三上水葦の思南かよ
別進其のるめ〜い〜の〜い〜
小山巖さま〜い〜い〜い〜い〜
月三竿す〜い〜思雲の中よ〜
〜い〜鏡山〜い〜い〜い〜い〜
主此のけ〜い〜お〜い〜お〜い〜
おも〜い〜い〜い〜い〜切す〜い〜

○
月雲かよ〜い〜い〜金風報
波子体傳乃を〜い〜映入り
〜い〜月のお〜い〜の〜い〜
〜い〜黄門の歎息れ〜い〜山
〜い〜世の中よ〜い〜
無常の親乃た〜い〜
世常〜い〜い〜い〜
志の僧都の〜い〜
〜い〜い〜
真〜い〜い〜
岸上〜い〜揚〜い〜

横川よつこつせりしん

史邦

鎖明く月けり入よ浮法堂
 安くく出くいさよふ月れき
 鬼灯は実も葉もかきもぬき式
 鶏頭くうを合をりりやうり
 枯乃乃の葉おろしや雑花
 花昔や松ぬたきよふ田成畑
 らやくやくくまのまるや葛れを
 る暗や煙のこころくとも乃花
 朔力く明日は日ぬき夢の花
 いさ川まやぬらよあけは藤原

史邦
 万年
 史邦
 山店
 史邦
 嵐竹
 風介
 史邦

大見

稻妻やうこの面をむきえん

史邦

小見

蟠娘のほむら胸のあうき式
 鶴鴉やけりしうせらる白川原
 せれさいや登出こぬり畔のうく
 巻の目もいりや言ぬく啼鴉
 かくやうらよ水を待ぬり鶯の那
 うり鶯討計れらるもくせり
 道く乃鶯けくらん茶とら

全
 水固
 磨盤
 ことと
 山店
 史邦
 嵐竹

香のあはれは油ぬれてはやく乾くか
屍とてかたじけなくや散らばる麻の葉
寝てくつ小床とて後うらむ子死

東山とてめらうして一葉さよふ出れ

丈山乃庵きつひこ引板れ音
墨時ハあもるぬ葉 雞 既

前書はきつひこ引板

葉の香や庭小されたる水苔れ底
又そくらのあはれや寝たれ後の葉
はくの香あはれはぬるこころ

人くくも古風ふたうしてさるる葉は

胡さくやよむもゆきも葉れむ
借まうけく一葉の香やうらの葉
あつ柳やまうさくはるる葉朝

芽さくつりニさくさく柿のさくし
下侍りしはしんり年一あや
をまうさく彼を柿舎もくらしはる
くくはるるよやうらうら

やうくはるる柿れあまも藤の流
濃柿をうらうらくはるる葉れ
木のすく裡出むく穂うけは

やにあふあふきりきりなまきれを清く
虫の音や閑寂なれば舞臺の中
死もきぬ旅の寐れよてよ秋れき
種の手も過ぎしはくくわてゆりりり
史邦 養浩 史邦 山店

嵐蘭追悼四句

うねりよや月ふくまきこらる柳 嵐行

菟麻れ寝を志けりり出ん海へ那 山店
うこみよれいつきれ草を墓れ那 史邦
千貫れはらき埋りり苦乃那 去来

史邦

身の秋や月も蘇もぬぬ蛸もも
つの音ははは角は新を忘る乃月
史邦
史邦

葉れ唐しはまははやに花れ
うふのこころと地あそびのりり
世ふの良少く住る傍とるく
西りのよきと花わうー山店集
のせしむとあういつたの終極と

紫の月のやま海あゝこほ
芭蕉

浮雲を又まゝ巻よこしめしれ

ゆかしうらた書の男の心よひて

しをぬしまふやふんをた

族の心をやこゝしけりぬ

か乃日向さる書巻をぢり席

とぞしるきしきしきとぞしる

さねやしき

月さびしく明智うまの味せむ
芭蕉
秋をゆるく標もなめるや葉れ霜
全

梧うらぐ秋の終りやほこり箱
全
ゆく秋のたもとものごとくや青蜜柑
全

題鷹山別

正行うかともひをきれ山つと
史邦

題司石

挾箱こいしくとらやほとめし
山店

題百葉

百葉もはくや葉れ間の南向
嵐竹

三吟

史邦

帷子けりみふととほく鷓のま
初を舟を橋のさると 夕人
夢の極よるのうひをくれば
水市よ人のきうれ夕 月
木刀のきれたくくろ居合抜
二階くくこれうまを裏板
室くくく茶の下をぬくく
石罅なるれくを縁寺れ鐘
もゆふは難をぬくをんか
くひくをくくもまけぬくを

いと
水 蕉 邦 水 蕉 邦 水 蕉 邦 水 蕉 邦

四十一

礼しむと隣の初茶乃と今と
秋入とこの筋きつとく秋
塩漬よすうにけくを月
を後みぬくくくのいと
持たしれ新刺刀もさひら
古きくく家めくくくくもの
是れ小茶むくくあはさ表く
小姓の口乃きくくく 月
竹橋の心よりくくくく
馬の糞くくぬくくく
夕らぬくく洗澤袋をなけはて
くくぬくくくくくくく吊

蕉 水 蕉 邦 水 蕉 邦 水 蕉 邦 水 蕉 邦

梳くつよまれとおしるひす海
 世あゝくくん明日はくくは
 水あゝひのぬきて床より坊子世
 百里とよめまゝ 船のこぬく
 引割くく依杖末のくと思ひ
 ろりもあゝはせぬ中く生うく
 ちこけく流る令那と月の音
 りくあをまゝくく 野の乃川色い
 措鉢よりるて色付るくく
 陸よりくくぬく 宿くくんの船
 小南宮跡をのちくくく
 二夜三日れぬくあゝ何くく

蕉 水 邦 蕉 水 邦 蕉 水 邦 蕉 水 邦

考てくく世まのくくおくく
 百姓やくくむ 苗代乃 際

蕉 水

座右之銘

人の短をりく事なれ
 己く長をくく事那ふ
 おとけ唇寒くく 穂の風

芭蕉翁

千鳥掛上巻

芭蕉

星橋乃園を尺すや啼ふも
 水佃のたれ 螢乃埋火
 翁の山入ちのきく梅を極ふく
 あもふ子猫のすふふを川く
 夢の声寂を待月のほれの色
 是乃く出され野をききさ風
 一里れ雲母なふく川上
 祠さくと入て門をよひらる
 市ふもて志く公を師をこれ

安信
 目笑
 如足
 葉言
 女風
 重辰
 言
 足

牛ふ終のみくもさう年より
 瀬川乃喜すちのうらみひき
 月秋ほくは螺者酒
 高奴子甲をうきて秋の風
 渡り袖さる字路の橋を
 産道名西外名れあはれさ
 家本名さくしをねる古枝
 吟をくはる食の時をまきり
 山もふあむとほくははりし
 辛螺のれ油すくはる氷
 角あふ眉く化粧さるやあ
 待言の文さ倉さるはの内

信風蕉
 笑風
 足風
 信足
 足風
 蕉風
 言蕉
 足言

高松畧

知是

神皇也 瘴氣よりのひしき多合
皆うらやまぬ 權の張分
つらき此白ひ 静か風止まぬ
さしほしき 今日にはれはの明ッ
夕月の利月代よきしきしき
とらしきしきしきしきしきしき

園友
安信
露川
業言
加瓶

高松畧

露川亭にて

智

子海一 秋今ももはれ雲の裏にある
小雲のそれしけ りあきと 雲
おの里へ 疾らき 雲さしきして
時運さるゆりり 冷る 霞茶
村まを 取らしきしき 雲れ月
吹きおろしぬ 溪のあき風

露川
獨ト
素見
吏明
執筆

蟠竜亭にて

金羅

深きしき 雲さしきしきまきしき
何をぬれぬしきしき 雲れあき
楠と裁目をぬれぬしきしきしき

知是
安信

次をのちけし白く放れ
馬ふそを神をよめくも片の上
わーのるまはちぬを月

蝶羽
重世
執筆

多公果

聖

から凡や吹むて吹て面白
そらんさやれを乃義
生奥のともくたふお八喜れ生
小くく月を空機
新源を藩
碁を

路通
全
足
全
通

カ
久龍もほきぬほ昔の
ふの中てもとやれ念佛
まの雲乃下又さか
さめよりれ
衣ざをよめて
あくたもく
何所と
玉を
冬乃月
系への
ん
髪

全
足
全
通
全
足
全
通
全
足
全
通
全
足
全
通

名湯其の全原はき土紀て
 口をきけけ八日けけけたのら
 大屋のれ序事の昔話も引替る
 福く——のまのまのま——並
 後の月えてううほれ十七夜
 芦橋乃中をものほれ新之
 ひくまきりまのまてほるまの声
 牙肉をきけけにほをくむ
 人まきれ白髪天窓は神いまり
 まつらまやれ情まきれぬ
 四糸より結ぶ紅のゆま原
 人まきりまて郭ま

是 全 通 全 是 全 通 全 是 全 通 全 是 全 通 全 是

山あのはまをひよとまきまき地雷
 おまきまきまきまき極細細の頭
 天井もまきまきまきまき古は眼
 まきまき乃ららら猫の穿殻金
 まきまきまきまきまき大芝居
 膝まきまきまきまき頂上

是 全 通 全 是 全 通 全 是 全 通 全 是

そく部ぬむ

子ま

まあまきまきまきまきまきまき
 漢語漢通まきまきまきまきまき

貞徳 徳元

夜まきても川、子もれ浦せくらり
 浦ゆりてあまもとわや船大工
 舟七夜舟報治、火まきし小夜舟
 小川や塵をとりぬまきし啼子とり
 せりしちや羽もやとめ次名海
 月此縹收るまの子もりぬ
 柳敷乃身いらきれ子もりぬ
 柳極は政中をそや及ちとり
 ゆらこれ津も食や及ちとり
 引波よ子もれま乃何まきて
 子もりし物もあまを此里の妹
 静のちの中のうこそは子とりぬ

秋風
 守古
 新足
 百丸
 伊丹 人角
 長父
 徳七
 妻秀
 金風
 和幟
 昨非
 甘泉

淋しきの裏啼くまもとりぬ
 文の家夜れ子もふおろし膠うれ
 赤赤乃新や心の小夜らとり
 いふなるまハ家やまのけ子も
 不二くはる流の夜入て子もりぬ
 起はせぬ物くちるまの細らとり
 けりし橋や波乃まま子破あま
 飛まきや鳴ぬちとり此燈拍子
 待多すしし風の夕れらとり客
 浦ふし子もよあらん綱代る
 友らとり火焼ぬ寺にゆよりり
 四ツ二ツ四名のねそは陸奥ちとり

文白
 月尋
 柳水
 全勝
 龍風
 光彦
 妻我
 泥隠
 鷹山
 幸来
 嘉樂
 文翔

傘海月相舎王とや後ちりり
天つるや女の髪はけり清きも
浦風の舟の外ちりりあきるのれ
噴の欠くなくらなちりり
吟詠や花とか一はか夜子も
淡子とり船子の夜息よゆき夜が
炉の炭をと啼ふとめくるまきり
とほりけぬ船や遊遊して写子も
唱とらふ唱海のはまや啼ちりり
け海よ竹叩け船引らりり
鶴のあしん矢橋の子も此
ねひりり波の巻と小夜子も

寸松
法竹
父市
笑翁
露之
白雪
桃光
周東
尹之
加行
夕道
軒藤

不ひりりさきまらるる耳を小夜子も
月宮の波の園あちりりりり
老ほきく女とるるやちりり
涙まつのもちやおほして啼ふも
海士の伝里や都と啼ちりり
け浦乃切ちりりの金かりり
浦の町やむりり此唱海写子も
鳥とく写しぬりある子もりれ
海を田又埋して写るるちりり
立波は移りきぬり写ちりり
け里のねよさけりや啼ちりり
往とせぬ来とせぬ浦の子もり

祖月
暮岫
苔巖
獨笑
酒聖
舟駕
業言
安信
重辰
雨亭
自笑
僧
牛歩

かつこしした男ふせりりーしき
傘侍せし習ふとくも文志るれ
一邑 雨伯

水仙花

るるあのかを味ふふ水仙花
ふ仙の地合ハナリ 猫武者
し列 蝶羽

茶の香

エサツクるまて

茶の香や頃アれと香ハ松とく
茶の香や徑よりくく星月夜
茶の香のりりや庭は露所
素堂 亀世 園友

雪

高津やもろ流の門を掃り
雪をよなきとてかさからぬれ
松の音ぬく音をいつれ炭乃音
あけかの音を耕を蹄うれ
蠅出つと尾うま舞よ陵の約
尼 智月 八菊 蝶羽 風水

氷

江麻子結ゆ氷れ下とみ
氷下 知足
亀世

雑冬

一とくも二すねもさしてきてこれ梅
その本より花のまばらに小まきこの柳
せめて十夜何少お八十九十九夜
大酒や三日足さく次更更次保
本枯よお祝しころお寺あられ
本かじしものしほりぬ柳火
若もかろして柳やかりきききれぬ
角はくむ越はれ牛のそまの柳
十才の指はくむ住くるそまの柳
さハいらん綴ハ切きて大根

杖橋亭
光亥
蝶羽
昨丁
一口
業言
龜世
和子
紀之
辛巳

丸合羽さくしきささるる敷うれ
けのちやと跡さして寝る湯婆杖
火か減の耳垣を喰火燧うね
そく菊さちうさく花梅の名あは
ま〜系よまおかく杖や橋の不二
富士むしつりあさるるよ河鉈け
鏡はくさく田の警や世中しと

柴草

代これ柴草さくしき吉野さすれ
うさたものよおまねくゆるう
ま今かきうめれ老もたせとて

知是
道寸仇
白雪
秋風
その女
如泉
柴友

神鷲のあしごとくやまのあはれ
遠きふの原あけせん権乃般
又國への跡かほする神日る那
つりのまよはま極の棋子松玉のり
霊長かゝ深もあふふ長夜如
ゆかりなる盤のまきき酒豆まき

舎羅 如風 雨亭 知足 團友 素堂

梅

梅の香は碎る庭きかよの雀うれ
梅のまよは妻うこころや水と更
祢是くくる歌吹なると梅乃風
竹のうたは釣瓶の魚や梅れ花

知足 柳水 和子 長父

千 十八

麴屋又とはり音何り梅のを
秋迦ハちと梅ハ導く鼻はうら
かゝるハ寒くわくして梅の花
梅の香やこかしくちうもかなは
八月はゆけらと波さ吹梅のを
這梅れ妙ふ新るさ月夜うぬ

神泉 周東 教員 柳舟 汀芦 野坡

聖廟奉納三句

松梅の庭や文武れ在ひくもり
お梅や子蛇さりと松の中
けまを食う神乃松れくれ

知足 龜世 蝶羽

光陰を命とすし庭の柳のうれ
船柳平等院乃本寺のふ

道市
沾洲

胡蝶

若くは化と蝶やほ名れも表紙
思きても裁令とらまぬか蝶衣

露之
木因

蛙

蛙啼一夜くくし水意を
降少くも形をを記るや蛙衣者
聖く又のさる葉物又なる蛙衣

蝶羽
婦斗
洛
素流

すんれ ちんほ

明ほのやまきくくくくくく
一此日れ鉄炮をたるとみれぬ
意をくぬ白くくくくくくく
ちんほのちまやむくくくくく
ちんれや白髪えやる足の下

東潮
蝶羽
東推
知足

田螺 田寺

半蘇れやぬ波は田螺のゆ
まきゆらまきゆらむくくくく
ちんれやまきゆらむくくく

下野
對才
一色
惟然

猫戀 はく文

鞠をぬてまゐる猫の行末なき
壁の穴取つ鳴つ涙これ恋
糸かけを板より越えはく文
はく文やふとありあやれはく文

陽が

布袋まゝに寝る

はく文やうらやう陽をうらやう
燐のゆきを陽をうらやう
陽をうらやう青あつ田うらやう

治竹

氷下

雨亭

舎羅

秋風

嬉々

東藤

蝶月

里の月をいふはく文
晩待り蝶乃ふはく文

蝶羽

蝶羽

蝸廬亭のけり

星崎のけりや低く亭れ上
越人

出替 甚良又入

出のハアとの寝るに抱をうとあつ
おかりりや水ききとの丹々車
甚良又入やうらやう

團友

蝶羽

柳唯

紙 鳶 雲 雀

春の風を切るや切らぬ此の心
若草よこころと消ゆるまき草哉

独笑 醉素 露川

上巳

可美れ姿ゆかりや市離
そとく縁して津門通るや鶴合
三日月の光やほてり此の心
沖の石目ふあはくは流るる川
鯉とてふ伏見の桃よりほろりハ

十_二 横石 農石 如賀 夕空 鯉立 龜世

挑唆して物しつらうてまふ

治由

花

とれハ和替

あまはあはれはあはれ

初花やこころよしくよ麻の角

高翔

知是亭の初花を御めやうて

え西よりやうれ男も花の濃

祖月

おきし

沙書令れ外十年やま乃山

三_三 一貫

老の山留

ゆらゆら

も雲うらうんくともと雲の油
いはれて雲よこさぬる日れ自
見よとのあうはひ美れともうれ
懐く程くゆりも雲うらうら
手喰へまゆめくむら花見成
さし流中志やまのうらとま雲
香く吞てるもふ雲合まらり

藤川 藤躬
紫白
辰国
千川
蝶羽
龜世

千

六三

櫻

嶺お海をよもく此奥のさくら
咲やうに春遊山猫柳山さくら
系接竹や雪田の洞さハまき
ひさくら世をうらふ山此山
はくら中も後美あもる後る親仁天
明河のく種よ咲さうけさくら
まくらハ系屋うま湯寺接式
山さくら表具してさくら
やまはくらひくらて外ハ町屋式

里杜
檜然
馬負
胡叟
申相
美言
知足
東推

ふきりしと海ちうれし
いふとありひ合ふと

大勢れ月ふ吞まきくはくくく家
川裾中散ハおほえて山はをら

秋

白支

折舟

奉納 歌仙

芭蕉挑青

笠寺やとくしぬ嵐も春乃五
旅暮と起とくしの鏡 接
月の弓消ゆくくに新子啼て
秀句なりくひくく多瀬さくり

知足

如風

重辰

千 九四

ソ糸をむも財取ぬとく毎れ甚夜
夜々あしきる庭の綿 木
の志ろれかさやうり伏てはッヌツ
むくくエ乃焦く 巾 糸
簾竿又散をほくきて風の音
下敷の証足と女と心家
さぬくれまゝ振袖は舊帽子志
くらうとを笛子吹流しきり
曇る命と夷ふんきく秋の月
露るふふあけり義経の像
白絹又秋と志のふと織こえて
院の曹子り薫をこく

安信

自笑

業言

枕筆

足

風

笑

信

辰

言

風

足

廊を双六くちりに志のひより
 火も消然の帰き 辰口
 名 菱をさあらしひ肩てのり 枕
 一二の船を汐すゆすれ
 系推し志砂の馬の夜やり
 刀をぬきとてたぬさおー切
 大年の宿れさかー火氣落く
 居眠るまやうくける ぬ入
 葉の戸は乳を吞ふよまよて
 かしこはをーし 牛時のを
 山はすやう何やら 高ス
 後おろしりあはれ此体しを

辰 風 言 笑 信 辰 風 辰 笑 言 辰 信

子
 十五

姉妹窓の細免月をくして
 名を付育と付ー白菊
 おろひま水衣儀のみに投入ん
 杖らきぬくく 扇引さき
 妙音のうしれ 眼をくち 拂ひ
 名 弄を歌く八重乃松く
 香盤尾 強の玉くれくちて
 暖くわくくく の 留ほ乃

信 辰 笑 辰 信 辰 風 辰 言 信

知世利掛下巻

芭蕉

杜若つれよあぢのにおひあり
ま穂やのよれうふかひ此来
二つしつと望する鳥夕とくま
かゝるさふ神をよれ一なる記
任別て月待かゝのうら侍ひ
それとくうり乃秋の風言
捨しひて妻呼兼又身ぬさき
念力思をこころふ志くま
道那もこの杉又一唱志やう一

知足 桐葉 叩端 業言 自笑 如風 安信 重辰

千 九六

昔者此傳より昔を投はむ
かゝ樹を花の下にのうらま
山あかたうふ八百の
ま透は院笑三ツ口ツ幽れる
ふをおりし親の月らう
おれ乃奴をゆるふおれ悔し
猫あはは猫をかゝれてから
るるも那ふ首とら女をり
あはれめあふ助を去措まの
名 燕しし後冊つきて放ちや
く飛 義とを背負はくきん
てられさく物よこをてまふひく

蕉 兼 端 兼 足 辰 端 兼 豆 蕉 信

又日の風はさるのこや
菓を妻も本かられてれは終らる
はるるの卯酉をのちをくらふ
是 笑 風

芭蕉行跡をたづね

夏はよあつた後ゆくと又三日
ゆるりしてゆくと君れ卯のま
あると〜予た〜ちの海
のありて真珠をれぬ〜不
たい史せ〜比あゆと〜きと

知是
桃青

才にまうておまぬ返り後尾城
のさる川を和えて三つ〜
十三段坂を登りて
か〜と〜の〜

川をやけ流しけし燕まくら
ゆとる跡を踏のみに〜夜
替れ松をたずねて燕ぬけて
家乃〜い〜又〜ち〜岩
を結て雲車の新寺を月
船を仕と〜し〜志けき〜
い川中〜れ〜ら〜に〜

全 是 全 露川 全 如泉 全

お櫻をまきしてあましく男ホ
 一草子も流るる書の上とて啼
 中々嘘をまかりし女乃て愛
 ぞくくしとぬの廟に波の音
 分よ負りし出くぬ兼房
 精進よ名代立ふ花の宴
 昔よりし事なき今も又賞さし
 飛翫りに女ひてりやゆれ所
 運ふ小糸彦屋よくするあ誓
 海産くまらるるまて此月又寺
 油くこあて蘭よ吹きん
 名 藤中よまあるいやさし人ん

泉 全 川 全 房 全 泉 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

序 八

きめふも今くも七葉ハ焼塩
 是乃あはうらハ軍を止て飛ん
 杞らり 追ひをぬの海ひ流
 志れぬ名れ立や細すれあ末を浪
 少敷寺のふくこさくよき
 月下しきの曇さを忌むり
 せめ下 隠る者し京や乾ん
 花の陰豆腐よ須戸の鯛うし
 被れぬ屋くし 標のまうしん
 夜くを山影休まのにまきくん
 あはうりよ嘘をまきし事なき女

川 全 泉 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

夏之部 夜更

夜更

くらしも交際も 結をかく山渡人
かしのや神の 初もこれ林の夜
夜もくいまのひまを人々の
拾もてまのまゝもて 葉のこころ
あまに世もまをさく 夢もたのむる
来山 之白 昔来 山靡 甘曆

よもよもぬく風うらまへて 卯月
美もよのよもぬく 暮れまゝ
呂千 獨ト

新樹

菫とよのよもぬく 暮れまゝ 梅
白もよのよもぬく 暮れまゝ 大垣 春人
美もよのよもぬく 暮れまゝ 蝶羽
美もよのよもぬく 暮れまゝ 米沢 竹友

郭公

けしきとよのよもぬく 暮れまゝ 伊丹 青人
郭公とよのよもぬく 暮れまゝ 之白
美もよのよもぬく 暮れまゝ 長鼻 百丸
美もよのよもぬく 暮れまゝ 古道
美もよのよもぬく 暮れまゝ 伊豆 芦本
美もよのよもぬく 暮れまゝ 大 童行

杜鵑啼きける泣の九輪の那
わくしききき口流しなるはなちりり
一声ハキキキキ色めはくし
山法師のうらみはくし
耳ぬさくはくし
けとをばきききききき

けとをばきききききき

きききききききき
けとをばきききききき
きききききききき
きききききききき

湫泉

知足

蝶羽

龜世

夕全

芭蕉

来山

昨夜

露宿

千三十

牡丹

けとをばきききききき
きききききききき
きききききききき
きききききききき

路通

知足

園友

杜若

二夜を歩はくし
る小市かきききききき
けとをばきききききき
きききききききき

三平風

素堂

不角

養民

全眼

立傘の侍あまのまはくも
今やうは如葉微笑のん杜る
隠るま家の原川ぬく白をいれ
知是

箏

竹の子れ裸よあはれハ誰ゆも
作れ子や名守乃世は溜りし
竹乃子のよおとるまのこを
竹の子を竹よなれよ竹の地
来山

端平

幸福ものちるもの終もきまふも
治竹

千
ホ一

おきてー 糍流よりいこさ
きりり尾の毛をくも何やめり
陰直切流やあやめれつこわし
子まきあふぬる懐又子持心即
岩花や朝のあやめを下よれこ
曙の色をさけくらのほらうれ
不秋
平之介
昨非

五月雨

五月五やとまをこをむまらり
五月五やと魚も白鷗をれあうれ足
五月五やと山もくまてなこの海
泉流
和子
蝶羽

水草花

花咲て花うきまのうきに浮く
泥龜や花うきまのうきに浮く
鯉魚て萍のうきに浮く

知足

蝶羽

つ子

百合草

五葉のひつりては百合草
唯百合草や小町むし後口紐
娘ゆりやゆりては百合草
あこころのむし遊くやゆりては

百里

律哥

龜世

金風

水鶏

氏雲はほけしとねく水鶏
ゆくのふもくつれて水鶏

荷兮

其香

蚊柱

蚊柱や角ふきとくもさひ
蚊柱もさつふ時あり夕あり
蚊柱よりあこころの鼻の先
蚊柱ハ夕は松のふくこの那

好永

魯九

甚好

釣壺

砂茄子

初あすや眼乃汝のいそがしく
玉の流すももぬの初あすひ
松首 泥燕

蓮

何の蓮の鞠くふや真れ例
水晶の山るこきてやとんく乃夜
立流すれぬ凡ふ蓮のれそん
如風 尊見 自安

題狂言

さむ水れ芙蓉よ和よ鬼の白
山扉

蟬

千 廿三

山階や小波さききくす衣
山階や花のをまこれかきくすも
夏まのちまききてほれ声る
獨ト 蝶羽 嬉斗

暑

暑をも回くしききく羅漢丸身
も一庭と人のいふきあつて
麻よつらき蓮よはくはつさく
鬼蟻蜂の園よけらとやけあつて
岩ひもこれ松はめくあつて
和子 鯉走 東行 下野 雨知 暮松

納涼

木因

子を宿めて涼しくも有るに在
涼しさを夢て又せたりある車
涼しさをみよるやけける帆うけぬ
極楽の風やお寺の夕とくく

沙風
木因
如足
醉素

名所之夏

星治 夜寒里
夜寒里 上野

涼まゝなり星治とやうお何れもや
星治のまき田よよんや波のくれ
星治乃ともうとれりく星治の那
うと切くも星治の里に娘夜火

惟然
湖十
暮船
釣壺

千
四

涼風やう夜をこれ里乃吹りまじり
娘夜に宿るの里も新ら夜火
一軒跡さ免の里やちとくまきす
夕良や上野を海よ油筒

蝶羽
千鶴
釣壺
霏文

行脚此う後

橋の小橋う涼もまき田の那
勢田れををうらりうらり星治
涼も羽のまよ帆うらり星治

知足
全
全

知足亭う少し

桂麻よおほりまきをこれ星治まき

支考

復々集文近とくしむなりき渡
し刈

俳諧種之部

鳴海眺を

芭蕉

ま川秋や海もまき田北一みとり

系りしるの口しり月

葦鹿栗ちのくく菓を致て

屋せしるみ菽乃行まよるや

蛤のくしぬりけるるあ子

望ぬるをあげておまのくま

号仙有畧

重辰

知足

如風

安信

自笑

十
成五

賀新宅

芭蕉

よきとぬや雀よらるるふ背えの粟

蒜よらるる野菓菊萱

投波を池の縁橋を去めて

川呂焼よ秋月乃ぬちの

枚垣の河ちのこよすこれ鶴乳多

く何れま下まき紙子打はく

知足

安信

芭蕉

知足

安信

種之部後句

初秋

笹竹の雀秋——ふ静の卵

秋風

是をいぬあはれ松尾の秋もうさ
和秋や等西を降る草乃而
十三 三唯

計七夕

土窓や赤の字さやうん天川
そくそ松の一本ぬさや星あふ
嫩女れぬ入やよありや月夜
らふらふたまのほろりや星連
おうらふ女のあややたすく連
かき合は蒲團をまきやるの雲
暮雲出き星さくやうら連ある
えれまわくれをんやてり川
露露 木因 金士 哥十 東白 紀之 村女 八菊

千 廿六

河風や接の喜吹やくく連
七夕や糸いろくくの竹乃毛
えつ殺や江戸の祝れはひ浪
龜世 一温 治竹

一葉

角文字ハ相の落くるニ系式
とる秋のさくりきハく呼るニ系式
相のさやうくく桶のふれけ
相いまさじんおぬこれ合息う
其泉 其萱 子山

生身魂 本名ありく

このやち格や生るをうたれ袖のさ
一鉄

死くして生きて... 蓮の葉もほ世の鏡も志みよりの
天垂 木因

玉糸

蓮泥やおとく其まゝ玉まつり
泪まらふい魂棚やゆき寺方
玉糸は... 自然の
うけても煙火鳴くは乃乃
おとこ女隔ぬあやむはらり
親をおりよ夜の山れ月乃々
芭蕉 小誰 龜世 繁羽 知足 戈磨

栗

チ 七

凡よ名のもへきものよ栗の二 惟然

青瓢 卯秋中一

けしよと捨て

夕のほや秋は... 此ぬくへ火
福見のさや起ことらほ七まを靴
ぬくもあゝ草屋おさゆる嵐
芭蕉 季臣 龜世

朝魚 本槿

朝魚や白髪... 月尋
せいらりよ... 知足
一ひのり朝魚と... 團友
朝魚の毛や網戸乃... 伯龜

花野 女郎花

惜うぬ月ハまぢりきとまきん
そまじくや風ふつらつら花露
姑母のあそくらうてゆくまぢり
りこつらつらまをさるるまぢり
角もくくと姫をさるるまぢり
松風の里まぢりくめめ女郎花

泥燕

一海

龜世

一海

茨口

露

静かなる月をまぢりて掌にまぢりの色

白走

寶永

お月をまぢりて掌にまぢりの色

きぬよまぢりてぬぬまのまぢり
まぢりまぢりまぢりまぢり

風水

之白

虫

虫よくまぢりて因果うまぢり
ぬけくまぢりて輝きまぢり

乙刈

木雞

淵泉

鹿

元山の松をまぢりて鹿の聲

知足

よたさけれりりれよある礎石
礎石程くそよけき奥庭を
辰圍 団友

鶏頭花

鶏頭や糸綿緋の裏は若
鶏頭や衣れがいらの夕日
夕暮よ何をちりさん鶏頭を
林風 亀世 安信

月

裏路ハ石知りる男の大かみ
江紅や管波月又種加賀の奴
いろくの松やあらん秋れ月
不変 北校 伯流

寝ておろし是てもれり旅の月
換鉄小も月ハ平くれと薄うれ
鉄蟬 素堂

名月

名月よいく今宵の月や三子島
名月やいまこ増賀の裸了後
秋そま中ハみ乃波六のほ経
名月よあハ魚もまの袂衣やら
名月ハ湯小やあも自在行
名月や照も曇もあれもの
今日の月いてや小町う袂衣よハ
名月ハ寝るけりてあハ袂衣の飛
立圃 言水 光彦 秋色 柳舟 芦本 嘯水 正次

白砂より引くとく今更りり今日月
ちやせ 無天
 名月や今宵一夜の秋の晴
た僧 露因
 名屋の日記よあふん月らんか
 名月や初来勝て内より居た
 名月やはおてはるる日を將まん
 名月の宴やワラの梅の花
 八幡あり
 名月此林藤の松やおとこやま
蝶羽
 月やちたれ袖ハ本の葉の十三夜
重春
 葉も本末六の玉ゆりよはつれ月
全暇
 酒盡て臂のよきさやほの月
長父

菊

白菊やさき菊の中此一花あり
由平夏 自入
 清香をあらうせうおれ菊の風
之白
 白菊や菊よおろろハなけれとも
蝶羽
 中櫛より代を流らるや菊れ酒
十律
 松のよふ代をあらうや菊れ酒
永冬
 白菊れ酒や後世の秘入る
知豆
 白菊れ代をあらうや菊れ酒
ちやく 龜世
 大人は酒あり菊れ酒を
醉素
 濡きハ山依の菊の自然うれ
大椿
 門あけてるる菊のよらうひり

破去際やそのこもむらり菊は花

文来

老の氣

白髪よ六なりしそけいれ小むさび

山靡

深川素堂よりみの中よ

丁六秋の月とらんたやせぬる氣

芭蕉

新綿

新綿や泣きぬ代の弓乃吉

晚山

新綿よまゐりの野やをたれ聲

泥燕

林風

秋暮

夕暮はいつもあれと秋の海

園友

馬牛の脊もはくされ秋は暮

松苗

何うと泣いても又えと秋の風

初候

樓閣乃もみや草摺たむ秋の風

八菊

癖とくも常ふき秋の雨くれ

横船

長夜

長秋や蜩の声も長恨一可

古 蝶手

音周や芳れ氣まよ鳴海深

其角

本枯乃吹切 後めくれ
鳴子鳥留士をえん 池塩尺坂
嵐雪
秋風

送帛布

萩うき如陸の純布 故まう
家名を鼻ひん 家のみまうら
来月ハ 花音海こころ けり
檜まうハ 依まうけり こと 船のま
貴時 ぬんをひり けり さく
船 ぬんをこころ けり こと 船のま
後て 送ら けり けり けり
時 ぬんを けり けり けり
宗波
露蓬
ちり
仙化
中川
濁子
李下
文麟
挙白

笈銘

蝶羽

世を面白く遊ばせられ ひとし けり けり
舟の動く けり けり けり けり
其廣き けり けり けり けり
倦り けり けり けり けり
かう けり けり けり けり
目と けり けり けり けり
星 けり けり けり けり
亡父 けり けり けり けり
人 けり けり けり けり

一冊のせんしをかきけしにせむ。其
其をさしむむさしく写海のひうかのひきま
なまふのひかりす其のすしうぬらと
歌よ又ま友ちうりの声をも歩深後ホーと
つきぬら乃きまなぬまこにまおの余情も
なつろーれん其のあ。許よりして勢田の
相葉々かふ性し。まの。歌波の春ふむまん
とていにおもひーや自負ひー。集おさめー
れ初先の産も滑なんほれあめにもせよと
いひあつく出ろー。うは其浦凡ふこころとせと
みーう記芦の下浪とにぬりぬばさむさるる
より真やー。なまこせめく其情はけあれ

ふまくはーく相葉の産も世のせりたれ
かくおもふよーとつひやうてこひちれとこは
の産乃こせいふー。ほんやまもー。まの
秋もあつとれまうこまもあつふもこせん
かといひー。去年の八月。秋も待とぬ
まし散りてまほつて送おこせこりいかにせ
産の玉も管ゆら。此記念とたりてあ。許は
不持ーにたり其秋はさぬら。婢女の玉様さふ
似とおふいさもこ。ぬたれら。藤人のエこと
ええー。うく海う。雲りこめらるに金泥の冷
のこほや。か散むしけうまこく。のけの
あ。の。なま。かふ。ま。き。て。お。ぬ。 九六

小蘇子とほけし、八負ふふふりり
正入好まありき此朝ふたもくもふふりり
おどしとおほふきけけのぬしちち
しりせしぬしひの文臺ふはふふ
公地し其れ其とふふふふふふふ
のしとぬししゆりぬ

笈言古极

极本書箱

袖物不壊

事約用詳

獨歩自負

客路友倡

坐懸眩嘘

卧枕顛康

滑誓之頓

詞華餘光

千 四六

屑吐之審

言實得蕪

四時佳景

身心洋々

一世消息

風月彷徨

其人已逝

爾笈爰昌

負篋終腐

秀喙無七

華實年浪州 十五冊

後野田治兵衛 十五冊

新玉負 一冊

若村七郎集 二冊

伊陽世芭許保竹先生著
芭蕉公存古郷傳

孫如冠の江戸見幸と伊陽との外状と考へくわはる
伊陽伊予の附合と通方海四唐乃考へくわはる
此書とありむ

字引
合類大節用集

文字出取和漢の法書と考へくわはる
全部十三冊

享和三年癸亥九月吉日

諸仙堂藏板

皇都書舗

野田治兵衛
浦井徳右衛門
筒井庄兵衛

